
死なないゾンビ

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死なないゾンビ

【Z-コード】

Z2207W

【作者名】

ちゃんこつ

【あらすじ】

無職の男 楠 信吾

彼は昔ゾンビと戦った経験があつたため、ゾンビのことは詳しい。そして、男はもうゾンビと戦わない決意をした・・・だが、ある日、一通のメールが届いた・・・そこに映っていたのゾンビ！

何が起きているか、わからない信吾・・・

このメールが本当かどうかを確かめるために信吾は、メールにうつっている場所を目指すのであった

ソノヒューマール

俺の名前は楠 信吾

無職だ

いや、これは不況の影響とか関係ない
自分で決めたから・・・
もう、重たい荷物は背負わないと・・・
決意していたのに・・・
決意していくのこ・・・

俺は、人の群れに囲まれていた
正確には、人じゃなくゾンビだが・・・
そして、俺のそばには女子高生が数人・・・
・・・こんなことになつたのも数時間前にあんなメールが来たから

数時間前

ラシード

信吾：「ん？ 電話か？」

「もしもしく？」

・・・ん？おかしいな電話・・・しまつたこれメールの音だ
恥ずかしいゝまあ、誰もいなかつたからよかつたけど

そう、今は〇時・・・

信吾：「こんな、時間にメールなんて送るなよ・・・」

よくよく、考えたら俺はメアドを誰にも教えたことないのに

でもつて、携帯の番号も誰のも教えていない……
じゃあ、誰だ？

俺は急にメールを見るのが怖くなつた……
けど、そのまま放置しても仕方ないので勇気を振り絞つて見た……
そこには……

アドレスはデータラメの文字

さらには、本文など何も書かれていなかつた……

信吾：「なんだ？このメール？悪戯か？」

そう言えど、最近のニュースで携帯会社すべてハッキングされたつ
て言つて見たな……

信吾：「悪戯だな……よし、削除！！」

俺は、そのメールを消した！

信吾：「はあ、眠い……」

今後、こんなメール来ても迷惑だから明日にでも、解約しよう
そう言えど、消したメールに何か付いていたよな……
なんだろう？

俺はデータファルダを開けて一番上にある、データを見た
そして、その中には……

俺の見慣れたものが移つていた……

普通の人はこれを見ただけではゲームがなんかに勘違いするだろう
でも、俺は違つたその写真を拡大などして……ようやく、わかつた
死体が動いていることが……

世間では、公表されてはいけないが……どこかの組織では、ゾンビ
の研究が完成したことは知つていた

俺は、ぞつとした

なんで、こんな写メが俺の携帯に送られてきた？

もしかして、俺は見張られているのかも知れない……

そして、俺はこの写メに夢中になつた……

だが、その十分後に新たなメールが来た

今度はメールに本文が書いてあつた

「『じらんになりましたか？

もし、ご覧になつたのなら

次の携帯番号まで・・・」

俺はその番号にすぐかけた

だが、一向に出ない・・・

もう一回かけようとしたら・・・

メールが来た

「電話ありがとうございます」

それだけだ・・・と思つていたがこのメールには動画が張り付けられていた

俺はその動画を見た・・・

そこには、ゾンビが女子高生らしき人を食べている姿が映っていた・

だが、俺にはその食べられている女子高生に見覚えがあつた・・・
いや、それだけじゃない。近くに映っているスーパーにも見覚えがある

わかつた・・・

この子は・・・なんで今まで気が付かなかつたのだろう

この子は隣の家の娘さんだ・・・

たまに会つてしまつたりもするから・・・知つていたけど

なら、このメールはもうこの子が死んだって言うメールなのか？

だが、死んだなんて隣の人から聞いたことなんてない

なら、今日のメールか？

しかし、このメールにはスーパーが閉まつている

確かにこのスーパーは午前2時ぐらいまで開いている

クソ！ 考えても訳が分からなくなるだけか・・・

仕方ない・・・スーパーまで行くか・・・

ソーシと女子高生

スーパー前

もつそろそろ午前2時だな・・・

俺は写真の場所にいた

ここなら何があるかと思ったが血の跡はなかった
周りを確認したが今は誰もいない

そして、そう思っている内に

スーパーが閉まった

女子高生の声：「でーーー

信吾：「！？」

娘：「あ～確かに

ウソだろ！？

俺は周りを確認すると向こうの方から女の子が数人あるいてくるのがわかつた

まさか、来るのか・・・

いや、あの子も女子高生だしこんな時間に外出するかもしれない
でも、もしかしたらあの写真通りにゾンビが来るかも知れない・・・
とりあえず、声はかけておくか・・・

信吾：「お～い」

娘：「あ～おじさんどうしたの？」

信吾：「いや、こいらへんで待ち合わせしてるから、待っていたんだが」

娘：「あ～まさか、彼女？」

え？何で俺の後ろに指刺してんだ？

・・・っチ！

俺はとつさに振り向いた・・・

そこには、スーツの女性がいた・・・
いや、スーツの女性だけじゃない

周りを確認すると10人近くの人数がこっちによってきているやばい、困まれたか！

娘：「ども、こんにちは！」

俺をすり抜けて、挨拶をした・・・その瞬間

スーツの女性：「ああ・・・があああああーー！」

娘が首元を噛まれた

娘：「きやあああ！！痛い、助けて！！」

娘は助けを求めているだが・・・

俺は、もう感じていた・・・

この子が・・・助からないと

女子高生：「ちょっと！！あなた、すみませんがあの子を助けてください！！」

信吾：「それは、無理」

女子高生：「なんですか！！？」

信吾：「あと、数秒かな・・・」

女子高生：「いつたなにが・・・」

さっきまで、もがいていた子が急に動かなくなつた・・・

女子高生：「いや！いやああああああああ」

信吾：「おい！！俺のそばを離れるなー絶対だぞ！！」

女子高生：「は、はい！」

信吾：「さて・・・ここからどうやって逃げようかな・・・」

女子高生：「戦わないんですか？」

信吾：「勝てるわけないだろ・・・武器もなんもないのに」

女子高生：「じゃあ、どうやってここから逃げるんですか！？」

もう、周りを見れば俺達を囮むように・・・ゾンビどもが来ているクソ！俺一人ならこんなのは楽勝なのに・・・

そう考えいる内に、一人のゾンビが襲い掛かってきた！

信吾：「くんじゃねえよ！！」

俺は、ゾンビに膝蹴りを入れ、そのあとに顔面を地面に叩き付けた

そして、最後に頭を踏み潰した・・・

グシャ

信吾：「これで、一人はおわ・・・」

ガシ！！

ウソだろ！！

なんで、こいつ脳をつぶしたのに・・・

動けるんだ！？

信吾：「つチ！！」

俺は捕まれた足を動かした

そしたら、すぐに取れた

信吾：「こいつら、まさか脳つぶしても動くのか？」

女子高生：「なんで？ゲームなら動かなくなるのに」

信吾：「お！？お前詳しいな・・・」

女子高生：「誰でも、知っていますよ」「れくらー」のことは
さて、冗談をこれくらいにしておかないと・・・

マジで。ピンチだ

一人だけ脳をつぶしたけどまだまいる・・・

しかも、つぶした奴はまだ動く・・・

信吾：「絶体絶命かな、これは・・・」

ゾンビと作戦

さて、ここで選択だ・・・

俺は命が惜しいなら、このままゾンビを2・3体倒して逃げればいい
でも、この子達守るとするなら、命の保証はできない・・・

・・・俺は考えた末に・・・

この子達を一時的に守ることを優先にした

信吾：「おい！！女子高生ども！！そこのスーパーに行け！！」

女子高性：「そんな、こと言われても無理です！最低でも一人のゾンビを相手にしないと・・・」

信吾：「それぐらいは、俺がやる！！・・・」

俺はそう言って、スーパーへの道を作った

女子高生：「・・・すごい」

信吾：「早く行け！！長くは作れないぞ！！」

女子高生？：「は、はいありがとうございます」

よし、あの子たちはこれで大丈夫だと思つ・・・

さて、俺はどうやって逃げよう・・・

俺も、スーパーへ逃げるつて選択肢があるんだが・・・

それだと・・・あの子たちが危険になるからだめだ

ならもう、いつそのこと、一旦こいつらを引き付けて一気に倒すか

それとも、地道に一体ずつ動きを止めるか・・・

待てよ・・・よく考えたら俺はこのゾンビ達の殺し方を知らない・・・

クソ、仕方ないこいつらを・・・俺の家に引き寄せて殺し方を探る
しかねえか

なら、ゾンビを誘導する必要があるな・・・

こいつらゾンビを引き付けるには、簡単だ

ゾンビは田は使わないが・・・鼻がよくなっていた

そして、こいつらの一番の目的は食べること

なら、匂いが強い方に来る・・・
よしー!とりあえずは、この作戦で行こう!

ゾンビに

信吾：「はあはあ、ここまで、ちゃんとつっこめてるのか？」

俺は後ろを振り返って確かめてみた

・・・ちゃんとゾンビがついてきてる

信吾：「とりあえずは、このまま家に行くしかないよな

信吾：「それにしても、この服そんなにくさいかな？」

俺は、引き付ける方法として自分の血を服にしみこませた

そしたら、ゾンビもはこっちを向き追いかけてきた

それは、よかつたんだが・・・

微妙に自分つてそんなに匂うの？って疑問に思つ

おっと、そう考へている内に家につい・・・

ウソだろ？

なんで？

こんなところにまで・・・

ゾンビがいるんだ？

しかも、十体とかそんな数じゃない・・・

見渡す限りに・・・ゾンビがいる

やばい・・・

さすがに、きついな

このまま、家に突っ込んでも多分死ぬと思つ・・・

なら、ここは

逃げるが勝ち！！

俺は逃げた・・・

走つて逃げた

そして、

20分後

信吾：「はあはあ、ここまで、逃げればいいだろ」

思つたよりもゾンビの足が速くなかったから逃げ切れた・・・

とつあえず、宿をとらないと・・・
このままで野宿したら多分食われるし
お！こんなところに孤児院がある・・・
仕方ない、今日だけここに泊まらせてもらひつか
俺はそう思つてインター ホンを鳴らした
しかし、おおきな孤児院だな・・・
女性：「はーい」
信吾：「あ、すみません」

ゾンビとスマッシュジャー

女性：「お断りします！！」
バン！！

・・・世間は冷たい・・・
つと考えている場合じゃない！！
でも、このあたりでここ以外に・・・
そう思つた時だつた

女性：「きやああああああ！！！」

悲鳴！！クソ、ゾンビが来たのか？

信吾：「大丈夫ですか！？」

俺は扉をたたいたそしたら・・・
中から開けてくれた

子供：「助けて！！」

泣いている・・・中で何かが起こつたな・・・

信吾：「よし、任せろ！」

俺は悲鳴の方向と血の匂いを頼りに向かつた

・・・多分もう一人は確執に死んでると思いながら
信吾：「この先かな？」

そこは、みんなで食堂だつた・・・

ゾンビさえいなければ今頃・・・

俺はあたりを見回した・・・その先には一人の女性がモップを持つて男のゾンビと対峙している

女性：「来ないでください！！」

女性は足を震えている

だが、そんなこと男のゾンビには関係なく・・・

今にもかみつきそうな感じで歩いていく・・・

俺は走つて男のゾンビの体を力限りに蹴つた！！

ゾンビは吹つ飛んだが・・・ダメージは全くない

信吾：「おー！…せつと逃げろ…！」

俺は女性に呼びかけた

女性：「駄目です、この扉の向こうには子供が…」

信吾：「なら、そいつらを連れて一階に行け…！」

女性：「は、はい！」

女性は後ろに会った扉を開け中から子供数人を連れてこいつとした・

・

その瞬間・・・最悪のことが起きた

バリーン！…！

窓が割れる音がした・・・

その割れた方向のは・・・

ゾンビの進化した・・・スラッシュシャーがいた

スラッシュシャーとはゾンビが一定の期間血を出し続けるばくまれに進化するゾンビ

スラッシュシャーの両手は骨が尖った状態で向き出している

それがに切られると血が当分止まらなくなる

これは実体験だから言える・・・こいつは相手にはしてはいけない

！

だけど・・・だけど・・・俺が戦わないと・・・ここのいる奴らは

全員死ぬ・・・

信吾：「やるしかないか・・・・・・」

俺は覚悟を決めてスラッシュシャーに近くにあつたナイフを持ち攻撃した
死ぬ覚悟で向かった・・・少しでも足止めができれば・・・そう思つていた

だが、現実は非常だつた・・・

スラッシュシャー：「うがああ！…！」

時が止まった・・・俺にはそう感じた・・・だつてスラッシュシャーの手が俺の目の前にある・・・ちょっとでも動けば当たりそうな距離に・・・

死んだと思った・・・もう無理だ・・・何もできない・・・実際に

体が動かないしな・・・

ごめんな・・・守ることができなくて・・・任せろって言ったのに
な・・・

次の瞬間・・・俺は・・・死んだ・・・

ここはどこだ？確かに孤児院で死んだじゃなかつたけ？

俺は水槽みたいなのに入れられていた・・・ここがどこだか分らなかつた

しかし、なぜ俺が生きているかがわからなかつた・・・
近くに誰もいないな？

俺は確認して、水槽をぶち破つた

ガツシャン！！

信吾：「ふう・・・」これは本当にどこだ？研究所ぽいが・・・

ウーウー

警報機：「何者かが侵入した模様、速やかに排除せよ。繰り返す、何者かが侵入した模様、速やかに・・・・・」

つチ！まさか、さつき出るために壊した水槽のせいか？

俺は近くにあつた作業服を着て逃げた・・・そして、逃げた先にはアサルトライフルを持った兵士らしきものがいた・・・

兵士：「いたぞ！！」

信吾：「クソ！！」

俺は近くにあつた机を盾にして弾丸から身を守つたほんとにここどこなんだよ！――

俺は机を盾にしながら移動した・・・そして・・・

ガン！！

信吾：「クソ！！行き止まりか！！」

俺は通路の行き止まりにいた・・・後ろから足音が聞こえる・・・はあ、ここで俺は終わるのか？・・・別のそれもいいかな？俺だって結構生きてきたんだし・・・でもなあ、18歳で死ぬのはなあ・・・

俺はこんなピンチなのにのんきなことを考えていた

兵士：「動くな！！」

後ろから声が聞こえる・・・終わった・・・

そう思った時、違和感に俺は気が付いた・・・あれ？あの兵士の天井・・・へこんでないか？

俺はさつき思いっきり蹴ったのに、傷一つつかなかつた頑丈なのに・・・どうして？

俺は一つの可能性を試した・・・

信吾：「なあ、お前ら、生き残りたいよな？」

兵士：「ああ、お前はここで俺達が殺すがな」

信吾：「そうか、一つ教えてやるよ・・・お前たちの天井を見ろ！」

兵士：「その隙に脱出か？」

信也：「いいや？お前らの誰でもいいみな？」

そう言うと、一人の兵士が自分の頭上を見た・・・そして

「…アーリーが、王室の儀式…」

兵士：「?.なぜだ」

兵士：「いいいか？」

二二二

? : 「がああああああああーーー！」

信吾：「やつぱり、聞かねえか・・・」

俺は10発ぐらい撃つた後、撃つのをや

なくなり・・・その姿をあらわした・・・

ソシエと研究所（後書き）

結構ゾンビネタ書くのがって難しいですね(^ _ ^)

ソンビとガトリングのスラッシュバー

・・・その姿は・・・スラッシュャーに似ていたが違う・・・なぜなら、スラッシュャーは・・・両腕がガトリングじゃない！！

キュウ一一ルーン

やほこ！――俺はとひね近づき、両腕を上に蹴つた

ガガガッガガガ！！！

ウ・・ソ・・・だろ?上には穴が開いていた・・・こいつが落ちてきた穴だが・・・その先には・・・こいつに似ているのが・・・5体ほど・・・いた

卷之三

信吾：「クソー！ ここも行き止まりかーーー！」

クソ！――クソ！――もう、俺には手が残つてないのか！？

後ろから足音が聞こえる。俺の手元にはアサルトライフルが残る。

勝てない・・・どんな手を使つても絶対に・・・

・・・また、諦めないと云はなければ、さつきみたいな奇跡は多分

俺は・・・覚悟を決めた・・・・あの、両手がガトリングのスラ

信吾：「来たか・・・・・ウオオオオオオオオおおーーーー！」

俺は、スラッシュヤー?の腕を狙つた・・・あいつが乱射してほかの

なんだ!? 今の・・・俺の声か?

自分で行つておきながらおかしな声が出た・・・まるで、あいつらと同じ化け物のような声が・・・

その時、俺の右腕がスラッシュャーの左腕に当たった・・・そして、捕まえようとした・・・けど、俺の予想をはるかに超えることが起きた・・・

ブチ

信吾：「え？」

思わず変な声が出た・・・

そして・・・・・

スラッシュャー？：「ガアアアアアアアアアアアアアア！」――！

スラッシュャー？がもがいでいる・・・左腕を失つて・・・・

そして、失つた左腕は・・・俺が持つてている・・・・

信吾：「はは・・・ウソだろ？」

本日何回目かの「ウソだろ」が出た・・・・

だつてさ、俺は引きちぎれるほど力を入れてないのに・・・・

俺は、この時やっと気が付いた・・・・

なぜ？水の中で酸素マスクを着けずに生きていたかを・・・

なぜ？俺が生きているかを・・・

答えは簡単だ・・・・俺は・・・・

信吾：「ゾンビだ・・・・

ソンビとカラス

ド-----ン

俺はこの研究所みたいなのを爆破した・・・
あんな施設があつてはいけない・・・俺みたいなのを増やしては
いけない・・・

俺は復讐を誓つた・・・俺をこんな体にした奴に・・・こんな研究
をしている奴を・・・皆殺しにしてやると・・・
久しぶりに外に出た気がする・・・俺は一体どれくらいの間あの水
槽の中にいたのだろう・・・

とりあえず、今日が何日かが知りたい・・・確か、俺が死んだ日が
大体2000年の4月だったな・・・
俺はとにかく、車を待つことにした・・・

7時間後

え～っとみ・・・み・・・み・・・クソ！・・・もうない！・・・

俺は一人しりとりをしていた・・・
むなしい・・・つと落ち込んでいる場合じゃなかつた。それにしても、
も、ほんとに車一台も通らないな・・・
仕方ない、走るか
俺は走つた・・・

30分後

・・・こんな近くにあつたんだ・・・町・・・
はあ、もう日が暮れてきたな・・・まあ、悔やんでも仕方ない
俺は町に入り口に行つた・・・それが、地獄の入り口とも知らずに・・・

お！喫茶店ある・・・あ～でも、今の俺金ないんだよなあ～仕方ないスルーするか
とにかく、そこら辺の人聞くか・・・
信吾：「すみません？今日何年の何日ですか？」

女生徒：「ええ～と確か、3000年の5月7日だつたと思いま
す」

え？今なんて言つた？3000年の・・・3000年？ウソだ
ろ？」

俺は1000年も水槽で生きていたのか？いや、ゾンビだから死ん
でいるか・・・

信吾：「すみません、もう一つだけ」

女生徒：「早くしてくださいね？もうすぐ、夜になるので」

信吾：「わか・・・夜？」

女生徒：「早く、あなたも家に帰るか銃を持った方がいいですよ？」

ゾンビがきます」

信吾：「ゾンビ！？」

女生徒：「驚くことじやないでしょ？」

信吾：「ありがとうございました！！！」

俺はこの場から逃げた・・・怖くて・・・そして、ゾンビのことを
驚かないことが一番恐かった・・・

信吾：「まさか、俺が1000年いな、内に・・・ゾンビは人を
食いつて来たつてことか・・・」

はあ、この場合人間が生きていたことが驚きだな・・・まさか、一
般人に銃を持たせるのを許してるとは

信吾：「ん？なんだあれ・・・」

俺は夕日の方に向いた・・・ほかの人も見ている・・・

夕日の陰でよくわからないが・・・何かが空を飛んでいることがわ
かる・・・

・・・・・

信吾：「みんな！！！早く室内に行け！！！」

俺はわかつた・・・あれば、カラスだ・・・

あれを防ぐ方法は火炎放射で焼くか・・・それとも、莫大な弾を使
つて全部撃ち落とす。それか、カラスが入りにくい場所に逃げるか・
・

だから、町などでは室内に入つて何とかするのが一番いい・
だが、それを知らないのか・・・町の人の反応は・・・・・
無視・・・・・だれも、もう夕日の方を向いていない・・・・
多分この人たちは・・・・ゾンビしか見たことない・・・人間の・・・
やばい・・・俺は逃げないと・・・何とかして生き残らないと・・・・
その時、一匹のカラスが・・・・一人の住人を襲つた・・・・・

ソンビと決意

! ! ! !

俺はとつさに研究所で拾つた、拳銃でカラスを撃つた

ハンハン

2発撃つた・・・だが、カラスは襲うのをやめない・・・弾は当たっているのに・・・

放送機： 警戒体制のレベルを1まで上げまく――住民の警戒心は早く避難場所に戻つてください――――――

卷之三

避難場所はどこだ？

男：早く避難しろ！！」つちだ！！！」

あーちか！！！俺は移動しようとした・・・その時、気が付いた
みんなが避難する中で一人だけ立ち止まって・・・「おかあさん、
どこお？」と泣いてる・・・女の子がいること！」・・・

おがおでんを扱してやる
だからこそ、おでん

女の子：一
へ？

俺は女の子を抱えたそして、避難場所に逃げようとした・・・が

ガシヤリリリ

閉まつた・・・避難場所の入り口が閉まつた

! ?

なんだ？またスラッシュヤーか！？

ブン！！

目の前を何かが・・・・何かがいる・・・俺は片手で女の子を抱いて・・・一步一步・・・後ろに下がつた・・・
女の子：「ねえ、私死ぬの？」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

俺は、スミヤーと单にが時、未知の化け物と單つた時より、衝撃が走つた。

親離れも・・・親に甘えてもいい年頃の子供が・・・死の瀬戸際にいる・・・

俺はこの時、心の中で決めた……俺が、俺か……復讐だけじゃない……俺がこの世界を……この世界を変えてやると……

ブン

何かが俺に当たるのとしている」とか分かった。
俺は拳銃を持つていて右手でその何かを思いつきり殴つた！
不思議と何かがどこにいるかが俺には分かつた

? : - ウガ、ガア。

声がしなくなつた・・・動かなくなつたみたいだ
レレーレのつり・・・レレーレナメーレ

圖文書記載之傳承與流變

避難場所は閉じている・・・

遂に堪かない

信吾：「何か忘れものか？」

女の子：「ううん、私の家か

町の外にも行けるから上

信吾：「よし！！行くぞ」

地下避難場所

信吾：「おーい、誰かいないのか？」

俺は地下で懐中電灯を持って歩いてた

故郷の風物

元気だな・・・ほん

いな・・・
俺はそう思った

中央広場

「あがあがー!!」

俺は抱えていた女の子・・・佐奈を下して母

母親：「佐奈ちゃん！！！佐奈ちゃん！！！」

佐奈の母親は立ってゐる。・・・魚がずっと佐奈も・・・

感動的な場面だな・・・・・

信吾：一ふ三よか二たよか二た

吉野：「ん？ あんた誰だ？」

? : 「私の名は守山の警備長だ」

信吾の「かく

先君が助けてくれたおかげで、まだ一人失ふたどみんな思ってましたよ……

信吾：「いいよ、礼を言わねなくても・・・俺がしたかつたんだから

丁巳

信吾：「つで、これからどうするんだ？」

守：「ここから、地下鉄で町の郊外に出る。そして、あたらしい街

「おひる」

信吾：「へえ」

そう言つた時だつた

・
・
・
・
・

ゾンビとのパンツの力

グウ～～～

つげ！

俺の腹が鳴った・・・・

守：「ははっは、」こっちにきたまえ！」飯を用意するよ

信吾：「すまねえな

守：「さあ、こっちだ

俺は飯を食わせてもらつた。そして、食わせてもらいながらも今この場所がどこか・・・なぜ、ゾンビが一般人に知られているのかを教えてもらつた・・・

俺が1000年前の人間だというのを隠して・・・

守：「さて、これから君はビデオするんだい？」

信吾：「ん？」

守：「いや、君がどこにも行かないならここに残つて町のガードマンになつてほしんだが・・・」

信吾：「悪いが、それは無理だ俺にはやることがある・・・」

守：「そうか・・・」

信吾：「まあ、次の町に行くまでは一緒に、その間だけでも守つてやるよ。できるだけな」

守：「ありがたい・・・なら、この銃を持つておいてくれ」

信吾：「俺には、自分のがあるんだが」

守：「はは、でもこの銃がないと多分君は死ぬと思うよ？」

信吾：「？」

守：「この銃はゾンビの動きを一定の時間だけ元壁に動けなくする、弾が6発だけ入っている」

信吾：「6発か・・・」

守：「ああ、だから使いどころだけは間違わないでくれ」

信吾：「りょーかい」

俺は受け取った銃を胸の内ポケットに入れた

「が 守： よし、多分みんなも食べたと思うしそろそろ、行きたいんだ

信吾：「なら、俺が外の先導する・・・多分一番戦いに慣れてる」

守：いや、それは駄目だ

守：「君は客人だ。だから、私とこの町の強い男たちを連れて行つ

二七八

信吾：「お前が残れよ」

「力又未 僕が一で詰縛は受けたんだ」

守・「それでも、やらなきといけない時もある」

はあ、こいつ結構頑固だな・・・・・

信吾：「じゃあ、ここはお互いの意見を尊重し……」

ガーニン

! ?

信吾：「なんだ？ 今の音！？」

信吾：「…………おい！お前らはなれっとお前らは地下鉄に乗

二二二

守： それじゃあ、君が・・・

守：「それは僕が…・・・上

信吾：「俺も後から追うーー！待たせとけよ？」

守：一・・・わかつた！！

俺はさっき音が鳴った場所に行つた・・・

地下鉄避難入口

「アーティストの心」

八三

ステッシャー……ガ!?」

信吾：「おや!! もうここまで来てたか!!」

俺は入ってきた場所を見た……さうに周囲を見た……

周辺には過疎に過れか數十人……俺の目の前にはアーヴィングヤードが

三
休

俺の後ろには、依奈とおかあさんそして、地下鉄はための二の湯所唯一の逃げ道…・・・

俺はまた・・・・・覚悟を決めた・・・・・

そして・・・俺はスマッシュジャー3体相手に・・・・素手で挑む!」

とにした
・
・
・
・
・

男：「あんた！何してるんだ。早く武器を・・・・・」

信吾：「おれのことは心配するな……自分のこと、女子供のことだ

二三九

俺は男の人の事ばかり……。マジシャンみたいだった……。

その二重の一體が俺に対して腕を振り回してきた……俺はそ

指一本で受けた・・・・そして、腕の刃を下に叩き割った

スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアアアアアア！」

金に付ける。金の上に金を付ける。金の上に金を付ける。

俺は次にスラッシュマーの腹をある程度力を入れて殴った・・・・
そして、スラッシュマーの一体は動かなくなつた

ソンビと食べ物・・・

ざわざわ

：「おい、あの人一発でスラッシャーを」

：「ええ、銃を撃つても動きさえ止められないのに・・・」

：「ほんとに、人間なのか？」

周りが騒ぎ始めている・・・無理もない・・・俺でさえ殺せるとは思わなかつた・・・・

と言つうかこれ死んでいるのか？

本気で殴れば腹を突き抜けるじや・・

まあ、いいや。人間さえ守れるんなら・・・・俺は人じやない・・

・スラッシャー：「ガアアアアアアアア！」

スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアアアア！」

もう、2体が来た・・・・

目の錯覚か、動きがさつきより遅い・・・・これなら、一体ずつ倒しても時間がかかるない・・・逃げる時間は稼げる・・・・俺は一番近いやつに蹴りを入れようとしたその時・・・・さつき殴つたスラッシャーがゆっくりと立ち上つた・・・・

そして・・・そいつは俺に襲い掛かつてきた2体を食べた・・・・

一瞬で、俺の目にも止まらない速さで・・・・

グシャ、グシャ、ゴック・・・・

食べ終わつた・・・その間、5秒程度・・・・多分この速さなら

ここにいる奴全員3秒もかからない内に食われる・・・・

俺がこいつを蹴り飛ばした・・・

だが、こいつは蹴りはできたが飛ばなかつた・・・・

よく見るこいつ・・・・だんだんデカくなつてきてる・・・・

最初は人2人ぐらいのスラッシャーだがこいつは3・4人ぐらいまでデカくなつてやがる・・・・

まさか、共食いをして進化をしているのか？ゾンビからスラッシュ
ーになつたように・・・・・

なら、進化する前にやらないと！！！

もし、こいつが進化したなら俺は負ける・・・ゾンビ達の進化は進
化前の約20倍・・・こいつが進化したら・・・待てよ？こい
つ今さつきよりも早く動いていた・・・・なら進化は始まつてい
る！――！

止められない・・・・・倒せもしない・・・・・・

信吾：「お前ら！――！――！――！――！」

俺は叫んだ・・・・・勝てないとわかつたから・・・・・一刻も早

くここにいる奴を逃がさないと思つたから・・・・・

スラッシュ：「ア、ガア、グギ・・・・・ふう」

目の前のスラッシュが「ふう」と言つた・・・・・

俺は驚いた、ゾンビが日本語をしゃべっている？

そして、皮がはがれて人になつた・・・

スラッシュ：「あ～腹減つた・・・・・おーそこのお前ちょっと
食わせろ」

そう言つて、人を食べ・・・・・・・

一瞬で動いた、見えたけど・・・・・

スラッシュ：「食わないよりましか・・・・・よへよへ、見ると

一人はごちそうだ・・・・・・

そう言つて俺を見た。

ソシヒと食べ物・・・（後書き）

最近のおすすめゲームってあります？
できれば、PSPかPS3がいいです

ソンビと本能

チヤキ

俺は銃を構えた・・・・殴りあつて勝てないと思った・・・・
スラッシャー：「はは、なんだそのおもちゃ？死人なら死人の戦い
方があるだろ？」

信吾：「俺は死んでねえよ」

スラッシャー：「そういうや、名前は？」

信吾：「信吾・・・」

スラッシャー：「俺の名は、ゾータ・・・今から500年前の元人
間だ」

信吾：「なんで、死んだ年を知ってるんだ？」

ゾータ：「お前は覚えてなかつたのか？ゾンビの記憶・・・」

信吾：「お前は・・・覚えているのか？」

ゾータ：「覚えてる・・・人を食つた時・・・進化するとき・・・
お前に殴られて進化したのもな・・・」

信吾：「ツク・・・」

ゾータ：「いいぜ、てめえが恐怖になつてているのもおもしれえ」

信吾：「変態が・・・」

ゾータ：「まあいいじゃねえか。さあ、殺させな・・・」

守：「信吾！！これ使つてくれ！！！」

後ろから守が何か投げてきた。俺はそれを受け取った。投げてきた
ものは刀

ゾータ：「死ねええええええ！！！」

俺は無言で鞘を抜き・・・・刀身で切つた。ゾータの首を・・・

ゾータ：「ガ・・・・甘いな」

信吾：「それぐらいわかってる」

俺は瞬時にもう一回切りつけた・・・今度は右手・・・次に右足

信吾：「な！？！」

な！！！！

ゾータは口で刀を受け止め・・・俺を蹴り飛ばした

信吾：「ツガ、ツハ」

息ができない・・・苦

息ができない・・・苦い・・・痛い・・・体が重い・・・ゾータ：「今度はじつちがやつてやるよ・・・・食べやすくシテ

ヤル！！！」

佐奈：「やめて！！！」

佐奈がゾータの足にしがみ

佐奈は必死に足にしがみついて止めていたがその姿をゾータは上か

ら・・・切り付け

確か俺つて1000年前の人間だ・・・・・・あいつは、500年・

•
•
•
•
•

信吾：一年上ヲナメルナ！！！！！！！」

卷之三

自分がやつたと自覚ができない・・・・・今だつて「大丈夫か？」と
言いたいがうまく言えない・・・・・

佐奈：「信吾……？」

俺は佐奈を無言で母親の元に渡した。・

そして、ゾータの方に向いて振り向く。本能の従い。ゾ

ンビの力を使つた・・・・・

ゾンビとその殺し方

ゾータは驚いている・・・いや、周りのみんなが驚いている・・・俺がスラッシャーみたいな声で吠えたから・・・

信吾：「ガアアアアア！！」

ゾータ：「ガ、グガア」

ゾータ：「ま、まだ、まだだ！――！」

今度はソーダが殴ってきた……俺はそれを避けずに

俺の顔を殴り続いている……だが、俺には痛みがない……

ゾータ：「はあはあ、どうだ…参ったか…！」

「……」

聖書の前で神聖な金幣を手に持つ人物の絵

俺はそれを直撃で受けた・・・・至近距離で撃たれたのを・・・・

ゾータ：「はあ、ウソだろ？」

ゾータ：「なんだ？」

信吾：「お前はどう殺せば死ぬ？」

信吾：「その方法を教える」

ゾータは「ヤリと笑つた・・・・・

ゾータ：「おまえは俺達が死なないこと知つてゐるのか・・・・・」

信吾：「まあな

ゾータ：「教えてやるよ。俺の存在そのものを殺せ

信吾：「どういうことだ？」

ゾータ：「簡単だ、俺を焼き、凍らせ、最後に塩水に浸せば・・・・・溶ける」

信吾：「それでいいのか？」

ゾータ：「動きを止めるのは色々あるが、殺せるのはこれだけだ」

信吾：「溶けたのはどうするんだ？」

ゾータ：「そこら辺の肥料にでもしろ、安心しな人体に影響はない」

信吾：「話を聞いてる限りじゃ死んでないな」

ゾータ：「ああ、俺達は死ぬことを許されていない」

信吾：「そうか・・・・・

ゾータ：「じゃあ・・・・・最後にいいか？」

信吾：「なんだ？」

ゾータ：「おやすみ・・・・・

信吾：「ああ、おやすみ」

俺はゾータを一瞬で燃やした、方法は秘密だ・・・
そして、凍らし、塩水に浸した・・・

みるみる、ゾータの体が溶けていく・・・
(俺もいすれかはこうなるんだよな・・・)

死んでゾンビになつたものは死ぬことを許されていない・・・
死んだ方がどれほど、楽なのかがよくわかる・・・

永遠の命もいらない・・・ほしいのはただ死ぬこと・・・

それが、ゾンビになつたものの・・・最後に思つこと・・・

俺は塩水になつた、ゾータを小さな瓶に入れた・・・
こいつをどこで捨てるか、考えておかないとな・・・
さて、ここからどうしよう？

周りの人たちは俺を見ておびえて・・・

佐奈：「すごーい」

信吾：「は？」

思わず変な声が出た

佐奈：「だつて、信吾が助けてくれたんでしょう！？」

佐奈が俺に抱き着いてきた・・・

・・・褒められたのか？

俺の思考がついてこない。だつて、目の前に化け物がいるのに・・・

周りの人たちはまだ、おびえている・・・

なのに、なんで佐奈は俺に抱き着いてくるんだ？

守：「・・・信吾、ちょっと来てくれないか？」

信吾：「ああ」

俺はうなずき、守の後について行つた・・・

その時、佐奈が俺についてくるつて聞かなかつたから、隣には佐奈
がいる・・・

佐奈のお母さんもいるが俺に対していい印象を持つていなければ
守は守で何考えているかがわからない・・・

信吾：「はあ」

思わずため息が出た・・・

どうしようかな、これから親玉の場所がわかればそつこく殺すんだ
が、わからぬから情報を集めないといけないし、ここにいる人た
ちをほつておくのもなんだし

守：「ついたな・・・みんな一人つきりにしてくれ」

着いた場所は、牢獄・・・

いや、昔牢獄として使われていたであろう場所に来た

信吾：「どうするんだ？おれを」

2人つきりになつた後に聞いた

守：「別にどうもしない、だが俺達人間を殺すなら信吾を倒さない
といけない」

信吾：「遠慮せずに言えよ、俺が怖いつて」

守：「大丈夫、怖いとは思っていない・・・」

信吾：「は？」

変な声が出た、だつて怖くないってどんだけ度胸あんだよ

守：「だつて、君は僕たちを助けてくれた・・・恩人に怖いなんて

失礼だろ？」

信吾：「・・・・はは」

笑えるな・・・こんな人間もいるんだな・・・
よし、決めた今だけこいつら守つてやる・・・
いや、人類すべて俺が救い出してやる
そう、俺は心に誓つた・・・

ソントク信号弾

守：「それで、本題だが」

信吾：「なんだ？」

守：「隠れながら、僕たちにひいてきてくれないか？」

信吾：「なんで隠れながら・・・そうか、確かにあの後だと、怖がるやつが多いな」

守：「そうだ、だから頼む・・・ずっとじやなくていい、せめて安定している場所まで・・・」

信吾：「いいよ、別に・・・そのつもりだつたからな

守：「ありがとう・・・後、あの刀は信吾にあげるよ

信吾：「いいのか？」

守：「僕たちは使つ時がないから別にいいよ

信吾：「そうか・・・なら、ありがたくもらつていく

俺はそう言って、拳銃を守に渡した・・・

守：「これは？」

信吾：「中には信号弾・・・一発だけ入つていてそれを合図に俺はお前らを助ける・・・いいな？」

守：「わかった」

守はうなずき、拳銃をポケットに入れた

そして、俺は元の場所に戻った・・・

佐奈：「信吾！――」

信吾：「うわ――！」

また、抱き着いてきた・・・

はあ、そう言えば俺、佐奈になつかれてるんだよな・・・

信吾：「あれ？おかあさんは？」

周りを見るといない・・・

おかしいな？さつきまでいたのに・・・

佐奈：「多分、厨房にいってない？」

信吾：「そうか」

佐奈：「それより、信吾！－あそぼう－！」

信吾：「・・・すこしだけだぞ？」

そして、遊ぼうと思つただが・・・

そんな時間はなかつた・・・

ソングヒーロー

：「あや ああああああああああああああ！」

：「たすけてくれええええええええ！」

信吾：「！？？」

悲鳴！？ウソだろ！もつきたばつかなんだぞ？

信吾：「佐奈隠れて……」

佐奈：「お母さん……おかあさーん……」

佐奈は悲鳴のあつた方向へ走り出した……
しまつた！悲鳴に気をとられすぎていた！！
ちょっと遅れてから俺は佐奈の後を追つた……

中央広場

信吾：「佐奈！？」

俺は佐奈にやつと追いつき持ち上げた

佐奈：「放して、お母さんが……」

信吾：「わかつているから落ち着け」

ゾンビ：「ガアアアアア！」

信吾：「つチ！？」

襲ってきたゾンビを蹴とばした……

周りを見るどゾンビ一色……

やばいな……佐奈を抱えながらこの数から逃げるのはちよつとき
ついな……

俺は佐奈を片手で抱きながら、少しづつ来た入口の方に歩いた……

：「きや あああ！？」

：「クソ！ゾンビがこんなにいるなんて……うわ……」

信吾：「こつから逃げろ！？」

俺は叫んだ……けど一向に来る人数が減らない……
なぜだ？……悲鳴は聞こえていくはず……まさか……

信吾：「クソ！……」

俺は入つてくる人の方に走つた・・・

途中にいたゾンビはすべて殴つたりけつたりして道を開けさせた
：「は！－あなたは・・・」

信吾：「そんなことどうでもいい、なんでこっちにくるんだ！？」
：「仕方ないじゃない！－こっちに・・・ゾンビがいるんだから！」

！」

信吾：「やつぱりか・・・」

俺のいやな予感は当たつた・・・
最悪だ・・・一か所じゃない・・・
今わかつていいだけでも2か所・・・
どうする？このままだと・・・

ぜ
ん
め
つ

だ

ゾンビと地下鉄

(クソー！こに安全な場所があるんだ！？)

俺は頭の中で探し回った・・・そして、思い出した・・・（待てよ・・・確かゾータと戦っている時、守たちは地下鉄で安全を確保しているはず・・・なら）

信吾：「おい！！確か次の町への地下鉄は安全だよな！？」

：「はい、確かめたので・・・」

信吾：「なら、今やることは道を開けなきゃいけねえことか・・・」

俺は佐奈を抱きながら、右手で刀を使い道を開けた

信吾：「さつさと行け！！」

：「あなたはどうするの？」

信吾：「この子を母親を探す、いいから行け！！俺の心配はするな

俺はそう言つて、佐奈の母親を探しにゾンビの群れに突っ込んでいた

調理室

信吾：「つチーーーにもいなかー！？佐奈ほかに心当たりはないか？」

佐奈：「・・・・・・」

佐奈は無言で首を振つた

（どうする？・・・もう避難した方がいいんだが・・・）

多分もう佐奈の母親は死んでいるか、それとも避難しているか・・・どっちかだ・・・後者の方だつたらいいが、死んでいたらゾンビ・・・

・
せめて、人を殺す前に溶かしてやりたい・・・

俺はそう思いながら調理室を後に、出た
変な匂いにきづかず・・・

地下鉄入り口

守……」こつちだ……信吾……

銃撃の方向から守の声が聞こえた

（）とあえず、佐奈を置いてから後で母親を探す」と云ひ（

俺と『たか』との間はスリラ・シャリが5体現れた……

守：「だが・・・」

信吾：「俺はお前らと違う！！女の子一人ぐらい抱えててもこいつ

そう言って守たちは地下鉄に乗り込んで出発していくた

(ケソ!!! ああい) 風に行こうたが結構き一しな。。。

刀があるから何とかなつていいが片手で佐奈をずっと抱えて

いわのせうりこ・・・

しかも、
5体

無茶な回遊をすれば佐奈にどんな影響ができるかわからぬ
しかも、俺はゾンビだから血で感染する恐れがある……

絶対に避けて、なおかつスラッシュヤーを倒さないといけない・・・

まか錆かるれにかくかがくかがモレぬいが

ソシエティ地下鉄（後書き）

最近、面白いゲームがなかなか出ない（+○+）

ソシヒビテブ

調理室

俺はまたこの場所に戻ってきた・・・

仕方がない、相手は死なない・・・

どんだけ戦つても疲れるだけだ・・・

俺はそう思いながら食料を探すこととした

この先何があるかわからない・・・

ならぬこしでも佐奈が食えるものを用意しとかないといけない
おれは・・・まあ、一年位食わなくても大丈夫だろ

そう考えながら冷蔵庫を開けた・・・

中には肉などが入っているが、怖いな・・・

仕方ない缶詰を探すか・・・

佐奈：「ねえ・・・あれってなんだと思う？」

信吾：「ん？」

佐奈が何か指差している・・・

まさか、ゾンビかスラッシャーがもう来たのか？

一応、足を切つて置いたけど・・・

だが・・・俺の予想を上回った、答えが・・・現実の答えだった

? : 「たす・・・ガア、ウグ・・・け・・・」

なんだ？ あれは・・・

外見からではただのデブだ・・・

だが、腹から何か出ている・・・

あれは・・・人？

知らないぞ？ こんなやつ・・・

まさか、スラッシャーの進化後とかか？

俺はそう思い・・・佐奈を抱きしめ、逃げ道を探しながら後ろに下
がつて行つた

母親：「助けて・・・だれ・・・か・・・」

!

?

とつさに佐奈の視界を手でふさいだ・・・

佐奈：「今の声って・・・まさか、おかあさん？」

最悪だ・・・

こんな最後かよ・・・

佐奈の母親はどんどん腹に吸い込まれている・・・
もしかしたら、助けるかもしれない・・・

だが、あいつに近寄つたらダメだ・・・

俺の本能が警告する・・・

何が起きるかはわからない・・・

けど、絶対に近づくことだけは駄目だ・・・

俺はそう思い、その場を後にした・・・

ソングと「嫌い」・・・

【地下鉄通路】

あの場所からなんとか脱出し、今はゆっくりと地下鉄を歩いている。

その間・・・佐奈は・・・

佐奈：「・・・う、ひつぐ、うつ・・・おかあさん・・・」
ずっと泣いていた・・・

俺は自分が嫌いになりそうだ・・・

いや、もうずっと前から嫌いだ・・・

いつだって、俺はあと一步のところで失敗して、見捨てる・・・

そんな自分が大っ嫌いだ・・・

けど、いつからだろう・・・

俺がこんな臆病になつたのは・・・

生まれた頃から？

そうかも知れない・・・

だけど、臆病になるにはなんかきつかけがあつたはずだ・・・

無職で・・・一人暮らし・・・

誰も関わりを持ちたくなかつた・・・

あの頃・・・学生時代・・・

・・・そうか、わかつた・・・

思い出した・・・

俺がこんなふうになつたのは・・・

俺のせいで、俺のせいではない・・・

ただ・・・不運が重なつただけ・・・

俺の一番・・・思い出したくない・・・

・・・記憶・・・

それが、俺をゾンビ達に戦うことにしてた・・・

一番の理由かもしれない・・・

ゾンビと過去

俺は学生の頃、いじめられていた・・・
引きこもつたりもして現実逃避をしたことがある・・・
けど、現実は甘くない・・・
家にいたら、家族の視線が怖い・・・
学校に行くにしても怖い・・・
どっちも嫌だ・・・
そんな毎日だった・・・
けど、ある日・・・
修学旅行で海外に行くことになった・・・
俺はそこで逃げた・・・
幸い、俺は英語などの他国語がしゃべることはできる
・・・逃げるのは失敗だった・・・
だって、人が食われているところを・・・
俺は逃げた、そして・・・数時間後目撃をした・・・
路上で・・・昼間・・・
銃を構えている人がいた・・・
その人たちみなヘルメットをかぶり顔が見えなかつた・・・
服は防弾チョッキのようなもので、革靴を履きみんな戸惑っている
・・・
周りには男や女が囮んでいた・・・
そして・・・発砲と同時に一人が食われ・・・
他のみんなは逃げて行つた・・・
逃げる方向はみんな一緒だ・・・
そして、始まつた・・・
ゾンビの地獄が・・・
俺はすぐさま引き返そうと思つた・・・
だが、足が動かない・・・

何もできない・・・

地面を這いつくばって逃げるしかない・・・

恐い・・・恐い・・・

嫌だ・・・まだ生きたい・・・

こんなところで死にたくない・・・

誰か・・・誰か・・・

そんな思いで必死だつた・・・

ゾンビの歩く速度は思つたより遅い・・・
けど、俺が動く方がもつと遅い・・・
そして・・・こっちに向かつてくる時・・・
ゾンビの足が何か蹴とばし・・・

俺の体に当たつた・・・

信吾：「な・・・なんだ？」

俺は確認した・・・

もしかしたら・・・

そんなことを考えていた・・・

けれど、あつたのは・・・

ヘルメット・・・

他に周囲には何もない・・・

狭い路地で這いつくばっている俺とヘルメット・・・

追いかけてくるゾンビ・・・

終わつた・・・

そう・・・俺は悟つた・・・

こんなことなら・・・

「さういふやうだよ。」

最後に

氣力を食いしにけり

そして

ゾンビが俺におおいがぶさわうとしたとき・・・

俺は意識を失してしまった。・・・

卷之三

拳銃を持つた警官：「大丈夫かい？君！！」

駄けつけて……ゾンビを俺に襲い掛かってくる寸前のところで跳り飛ばした・・・

ハ
ン
シ

動きがさらに遅くなつた

その間に、警官は俺を担いで逃げてくれた・・・

ビル

拳銃を持った警官：「大丈夫かい？名前は憶えてる？」

おひがとひさしき

言語：「蘭 言語で」

拳銃を持つた警官：「そう、僕の名前はラック＝シャーナ、気軽に

ラックつて呼んでくれ

信吾：「はい・・・」

ラック：「とにかく・・・何が起きているか調べないと・・・」

そう言つてラックは立ち去ろうとした

信吾：「ちょっと、待つてください！！」

ラック：「ん？」

信吾：「なんで、俺を助けたんですか？」

ラック：「助けたかったから助けた・・・ただそれだけだ」

ラックは建物から出て行つた・・・

そうして・・・俺は足が動けるようになるまで・・・

ここで、待つた

2時間後

信吾：「よし・・・動くな・・・」

俺はジャンプをして確かめた

信吾：「それにしても帰つてこなかつたな・・・」

もしかしたら帰つてきて一緒に逃げてくれるかも知れない・・・

けど、そんなことが・・・

あるわけがないんだ・・・

みんな自分の命が大切だ・・・

人を助ける暇があるなら・・・

自分が助かる道を選びたいだろう・・・

人は本当の選択を迫られたら・・・

多分、助けない・・・

たつた・・・一つの命だから・・・

けど・・・もし、永遠だつたら？

そして・・・俺は心の中で・・・

その疑問が生まれた・・・

だけど・・・

考える暇は・・・

なかつた・・・

バアン

拳銃！？

確かに今撃つた音がした！！

近くにいるのか？

そうして・・・

ビルを出て行つた・・・

ゾンビと分かれ道

信吾：「どうちだ？銃声が聞こえたのは・・・」

ビルを出てから銃声の方に向かつたら、分かれ道があつた・・・
どちらも、ゾンビがいる・・・

ただ・・・右は二人・・・左は一人・・・
左の方がわずかに少ない・・・

だけど・・・

ゾンビは人が多い方に行く・・・

なら、右に行つた方がいいんじゃないのか？

そう考えていると・・・

また・・・

バーン、バーン

銃声が聞こえた・・・

右からだ・・・

・・・俺は覚悟を決めて・・・

右に向かつた・・・

念のため、俺は木の棒を拾つていた・・・

どれくらい、使えるかわからないけど、ないよりはましだ・・・
けど・・・俺が人を・・・ゾンビを殴れるのか？

もう、見ても足はすくまないが・・・

俺は・・・

そう考えてながらも、走つていた・・・

そして・・・人の群れを発見した

だけど・・・その中にラックの姿がなく・・・

みんな怖がりながら戦っている・・・

俺はその場を後にした・・・

助かりたいが・・・

なんだろう・・・

あの中にいたら、駄目な気がした・・・
そして・・・

その予感は的中した・・・
：「きやあああああああ

：「うが・・・なんだ・・・？」

：「ばけものだああああああ！！！」

信吾：「・・・！？」「

俺は振り返った・・・

そして・・・

俺は・・・

この目で・・・

見た・・・

ラックの

姿を・・・

ゾンビと宿泊

だが・・・
その姿は・・・
もう、人ではなく・・・
ゾンビでもなく・・・
ただの、化け物だ・・・
かろうじて・・・
顔が原型をとどめていた・・・
そのおかげでわかつたが・・・
体は、化け物だ・・・
人を切り裂くほど、鋭い骨が突き出ている・・・
：「たすけて・・・つ！」
切り裂いた・・・
血が傷口から・・・吹き出している・・・
人は皆・・・自分で助かるうとその場を離れようとする・・・
だが、ゾンビに囮まれていてる・・・
どんどん食われている・・・
俺はそれを・・・
ただ・・・
見ていた・・・

どうしようもない・・・

最後の悪あがきぐらいしてみるか?

意味もない・・・

どうせ、数が減るだけで・・・

俺が死ぬことには変わりがない・・・

・・・どうせなら・・・

学校のやつらも巻き込めばいいんだ・・・

俺は・・・走った・・・

俺達・・・学生の宿泊の場所に・・・

ソンビとボール

先生：「…………教頭！！楠君が…………」
教頭：「帰ってきたか！！」
かえつてすぐに先生たちに迎えられた……
どうやら……知っているみたいだ……
先生：「楠君！！こつちに来て！！」
信吾：「いいのか？ゾンビになっているかもしれないんだぞ？」
教頭：「？・・一体なんのことだい？」
・・・知つていなか……
なら、巻き込むのは簡単だな……
思わずにはやりとしてしまった……
だつて、誰も知らない……
このあたりで何がおきてている……か……
待てよ……なんで知つてないんだ？
拳銃の音が最低でも聞こえているはずなのに……
知らない……振りをしている?
だが……なぜ?
途端に周りの人があやしく思えてきた……
信吾：「嫌な予感がするな……」
先生：「？・・まあ、こつちで晩ごはんを食べましょ」
ガツシャー――――――
信吾：「つチ――！」
俺はガラスの割れる音とともに、体を机の下にそむけた……
だが、悲鳴は聞こえない……
なんだ?
先生：「ツプ、楠君……そんなに怖がらなくともいいのよ?」
ガラスの方向を見た……
そこにはボールがあり、それで割れたみたいだ……

紛らわしい

そう、思つた・・・

ガツシャン

また、なつた・・・

俺は反射的に机の下に行つた……
そして、今度は悲鳴が……聞こえ

：「なんだ！？」の、化け物は！――！」

そして、最も安全な道を選び・・・

走り出した・・・

後ろから教師と生徒が数人ついてきた。・・・

仕事の仕事が
が知りたい
エレベーター

1
三

先生：「あたしがえん・・・まあまあ、

先生：「さあ、あれはなんなんですか・・・」

戸惑つてゐる・・・

そりや、化け物に出くわしたんだ・・・

だから・・・」こののせ逃げてきた者達・・・

これから、どうしようかな？

もう生き残る可能性ほとん無い……つで、もって何でもいい……

• -
• =
• =

選択し、残つてなくないか？

いせいせー・・・

せっかく、ここまで楽しいこと・・・。続
本当に？

俺がしたかったのって・・・。

こんな・・・むなしいものだっけ？

違うだろ！――！

俺がしたいのは・・・

ソノヒト壁

地下鉄通路

佐奈
しん
信唯

信吾：—！？

佐奈： 乾いたよ。

性をもつてゐる。この性質は、たゞ、この種の機械が、その機械的構成によって、その性質をもつてゐる。

「アーティストの死」

左奈：「多分、1時間ぐらゐ」

信吾：「そうか…」

信吾：「よし！ 行くぞ！」

佐奈：「うん！！」

信吾：「なんだ？」

姿が見えなし

卷之二十一

卷之三

声が響く

暗闇での、
視界の差は5分5分だが
・・・

佐奈のことを考へているとやはりばい・・・

信吾：「乗れ！！」

俺は佐奈をおんぶして、地下を走った。・・・

2
'30 分後

守：「信吾！」

信吾：「やつとおい着いた！」

守：—すぐここを封鎖する！！」

信吾：「どれくらいかかる？」

守：「一分もかからない！！」

守は拳銃を引き抜いた・・・

そして、俺達が通つてきた上を撃ち・・・

起爆した・・・

ドオオオオオオオオオオオオ

信吾：「…………これで、安全は確保できたか？」

「……」二度、壁を叩いて壁へ・・・・・

信吾：「俺の出番ないよな？」

守：「ん？・・まあな」

信吾：「なら、ちょっと飯食わせてくれ」

守：「はいはい」

そう言つて飯を用意してくれた・・・

守はにいやつだ・・・

何も聞かないでくれる・・・

信吾：「はつは・・・」

・・・無理だつたんだな・・・

助けるの ・ ・ ・

そう、実感した・・・

笑つていいが……

心のどこかで、死ぬ

あらわしのう

ゾンビと田中

【3年後】

佐奈：「信吾！」

信吾：「おう、おかえり」

佐奈：「あ、ただいま！！」

あれから、3年がたつた・・・

俺は佐奈のめんどうを見ながらも・・・

探していた・・・

ゾンビの親玉を・・・

もう、死んでいる可能性も十分にあるが・・・

ゾンビになっている可能性がある・・・

だから、佐奈に内緒で探し回った・・・

そして・・・場所が分かつた・・・

正確には、一定の範囲がわかつただけで正確な場所がわからない・・・

そして、研究所の数が多い・・・

ここから、数キロの場所やさらに遠いのがある・・・

数キロはもう調べた・・・

いなかつたが・・・

ゾンビが・・・3年前と比べ物にならない・・・

スピードも、力も、知性はないが・・・

今の人間じゃ・・・

だれも、勝てない・・・

俺がやるしかない・・・

だけど、もし負けたら？

人間はもう、食料としてしか扱われない・・・

俺のようなゾンビも結構増えてきた・・・

そのたびに・・・

ゾータと同じことをした・・・

瓶の数ももう、50を超えるようとしている・・・

これを・・・なにかに使えないのか？

ゾータは人体には影響はないといった・・・

もし、俺が飲んだらどうなるんだろう？

・・・軽率な行動はやめよう・・・

とりあえず、今は・・・

このことを、佐奈に話すか話さないか・・・

シンヒと門

佐奈：「いつてきまーす」

信吾：「おう、いつてらひしゃい」

夜が明けた・・・

行かないといけない・・・

結局俺は佐奈には話さなかつた・・・

けど、後悔はしない・・・

そう思いながら・・・

俺は行く準備をした・・・

【門】
警備：「あれ？ 楠さん」「は出ひれませんよ？」

信吾：「門を開けてくれ」

警備：「いや、だから」

信吾：「開けろって言つて『いるんだ』

どすのきいた声で脅した・・・

警備はすこしおびえたがすぐに聞き返した

警備：「なんで出るんですか？」

信吾：「用事でな、すぐ帰るよ」

警備：「愛用の刀と食料をそんにもつてですか？」

信吾：「ああ」

警備：「子供はどうするんですか？」

信吾：「聞くな・・・あいつだつてわかつて・・・

ドオオオオオオオン

信吾：「！？」

警備：「！」

後ろから爆発音がした・・・

この町の周りは城壁で囲まれている
なら・・・何者かが・・・

城壁を破壊した？

信吾：「つチ！」

俺は食料をいれたバッグを下に置き、刀だけで爆発の方向に走り出した

佐奈が・・・

とても心配だった・・・

信吾：「だいじょうぶか！？」

学校では校庭に人が集まっている。・・・

先生たちが周りを警戒し、警備の者を待つてゐる

先生！？ だれですか？」

教頭：「ああ、楠さん！ 佐奈ちゃんは中の方にいます」

卷之二

俺に対してスラッシュヤーが食いに来た。・・・

信吾：「遅いんだよ！！」

俺は刀を抜き、スラッシュヤーを縦半分に切った

燃やす方法は刀の摩擦・・・凍らす方法は俺の体温・・・溶かす方

最愛二五二二

しまつた！ 瓶を置いてきた！

…」とおもふに落すか？

けど、なんの？

食い物？

だつたらいいが・・・

別の物で人間の毒になつたら?

書類 : 「ひら」

俺は落ちていく液体を・・・

ロで受け止め

そして、その辯論。

俺は
・
・
・

体の中で別の何かがうずきまわっているのを感じた。・・・

寄生虫が這いずり回つてゐるのな感覚……

信吾：「ガ・・・アガ・・・」

俺はゾンビの榮養になつた」とを：

俺は理解した・・・

ソントと血反吐

信吾：「や・・・・ばい！！」

このままじゃ、佐奈達を襲う可能性が出てくる……。」

俺は一目散に爆発の方向に向かった・・・

佐奈には声もかけずに・・・

【爆発現場】

守：「信吾！？ 来てくれたのか？」

その場所は予想通りゾンビがいた・・・

中にはスラッシュヤーなどがいるが、俺みたいに知性を持ったやつはないっぽい

信吾：「ここか・・・らは俺に任せろ」

守：「どうした？ 調子でも悪いのか？」

信吾：「いいから！？ お前らは壁の修復だけを考えろ！？」

俺はそう言ってゾンビの中に入つて行った・・・

とにかく、入つてきたゾンビを外に連れ出さないといけない

俺はそう思い、一体ずつ蹴とばし、外に出した・・・

信吾：「全部出したぞ！？ ・・・ガハッ！？」

血反吐を吐いた・・・

こんなこと初めてだ・・・

守たちには見えてないよな？

守：「信吾！？ そこから、離れてくれ。そこをふさぐ！？」

大丈夫みたいだ・・・

そして・・・俺は戻ることができない・・・

信吾：「はあはあ、守！？」

守：「なんだ！？」

信吾：「佐奈のことは頼んだ！？」

俺はそう言って・・・

壁の外に出た・・・

大事なものはすべておいて・・・

ソンビと外

【壁の外】

信西ノ一卷

あわかに 一曰かた二た

備はゆうくひと研究所の方に移動してしまった……

この先 なはか起るがれかなひ

かと云ふ。備が死ななかつても、

「俺はそれを用心しなくてはいけない」と、

作者　ニホンノヨリ、シテの数カクがいた

星様一枚が少なかつて……

جیلیک

）が却、俺は「丁度も競合してゐるカジ」……

今スラッシュヤード5本目

少なからぬ

嫌な予感がする・・・

でも、もう俺は・・・

戻ることができない・・・

俺は
・
・
・

JOURNAL OF

研究所を破壊し、親玉を殺しに行く・・・

それが
・
・
・

俺の役目

ゾンビ達の ・ ・ ・

死んでいた者達への慰め

本当に？

そうなのかな?

俺がしないといけないのは・・・

そんなことなのか？

冷静に考えろ・・・

俺が今・・・

本当にしないといけないのは・・・

死んだものを慰めることじゃない・・・

生きている者を・・・

助けること！！

俺はそう思い・・・

戻った・・・

人間がいる・・・

守がいる・・・

佐奈がいる・・・

あの・・・場所へ・・・

ソシヒと手遅れ

【町】

信吾：「う・・そだろ」

そこは、もう俺の知つている町じゃなかつた・・・
ゾンビであふれかえつている・・・

そして、人はいない・・・

遅かつた・・・

信吾：「いや、まだだ・・・」

俺はかすかな可能性を信じて人を探した・・・

5時間後

【信吾と佐奈の家】

俺は膝をついた・・・

町のいたるところを探した・・・

最後に自分の家を探した・・・

そこには・・・

血まみれで・・・

壁に釘で張り付けられている・・・

佐奈と・・・

守の・・・

変わり果てた姿があつた・・・

信吾：「うああああああああああああああああああああ
最悪だ・・・」

手遅れだつた・・・

自分を責めるような言葉がたくさんあふれ出でくる
なんで・・・

俺はあの時・・・

出て行つたんだよ！－

行かなかつたら・・・

佐奈は

守
せ
・
・
・

助かつたかも知れないのに！！

「……………」

ゾンビと時間

・・・ 一体・・・

どれくらいいたつたのだろう・・・

俺は佐奈と守の墓を作りながらそんなことを思った・・・

泣き叫んでいたのはどれくらいだ?

墓を作つていたのはどれくらいの時間だった?

死体を焼いたのはどれくらいだった?

俺は時間を気にしていた・・・

周りにはもうゾンビの姿がない・・・

ということは他に人がいて・・・

そいつらを食いに行つた・・・

その可能性が出てくる・・・

今のゾンビの足の速さは、50m13秒・・・

だから・・・

何時間ここにいたかさえわからば・・・

ゾンビを追いかけ・・・

ここまでした奴に追いつけるかもしれない・・・

だけど・・・

時間がわからない・・・

だれがやつたかもわからない・・・

だつて・・・

俺はここにはいなかつた・・・

どうじょひ・・・

今さらだが行くのをやめようと思つてきた・・・

俺の生きる・・・

希望はもうない・・・

なら・・・ゾータやほかのやつらみたいに・・・

無理だ・・・

あの作業は最低でももう一人いる・・・

死にたい・・・

だれか教えてくれ・・・

俺は・・・

これから・・・

どうすればいいんだ?

ソノヒと怒り

俺は重い足取りで家を出ようとした・・・少しでも長くこの家を使いたい・・・

佐奈との思い出

守との懇二日

「この家にはいろんな

だから

そのためには補強が必要だ。

そう思い俺は家を出た・・・

? : - おや帰

信吾：ああ～

れかくしの父は、以後お見知りお話を

スースを着て・・・

ああ、俺と同じやつか・・・

信吾：「忙しいからどうか行け……」

ジーク：「いいのですか？」

信吾：いよいよ別に・・・」

シリケート殺したのがわたくしでも？」

バ
ン

ジーク：「！？・・ガア！」

俺は殴っていた・・・

殺したのか・・・

こい一だとれか二だから・・・

信吾 おらあまあまあまあ

圖文歸一

一
三

それを8回繰り返した・・・

ジーク：「ア・・・ガ？」

なにがおこったか・・・

わかつていない・・・

だけど・・・

俺の怒りは収まらない・・・

数分後

ジーク：「・・・・・」

動かなくなってきた・・・

さつきまで少し動いていたが・・・

もう反応がない・・・

信吾：「はあはあはあはあ・・・

むなしい・・・

こんなにもむなしいのか？

さつきまであんなに憎んでいたが・・・

いや・・・今までにくい・・・

だが・・・

なんだらう？

この感覚・・・

復讐を成し遂げたから？

違う・・・

悲しいんだ・・・

むなしいし、悲しい・・・

やることが・・・

なくなり・・・

生きていく意味もない・・・

死ねない・・・

・・・そう言えれば・・・

こいつ・・・

氣絶したのか？

動かなくなっているけど・・・

まさか死んだ？

いや、こいつはゾンビに襲われてない・・・

じゃあ、ゾンビのはずだ・・・

一応、のど元に手を当てた・・・

これは人間もゾンビも一緒・・・

生きているなら・・・

呼吸で動く・・・

だけど・・・

こいつは・・・

動いてなかつた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207w/>

死ないゾンビ

2011年11月24日19時48分発行